



Title	ひとつの世代を回顧して
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外大英米研究. 1994, 19, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99162">https://hdl.handle.net/11094/99162</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ひとつの世代を回顧して

金 山 崇

こんな一文を書くように求められる日がついに来てしまった。33年間、いや学生の頃も含めて更に長い年月にわたって、おつき合いをして頂いたこの大学と別れる日が近い。学生の頃大好きだったこの学校を去るのだからもっと感傷的になるものと予想していたが、案外穏やかな気持ちでいる自分に気がつく。まだしばらく頑張ってみたらという向きもあって、すぐに隠居するわけではないから、かも知れない。あるいは、大学紛争以後、昔とは変わってしまった母校に違和感をいつももちながらも自分の愛着する道を信じて、精一杯ここまでやって来たという、ほっとした解放感に浸れそうであると予想しているから、かも知れない。

いまこうして、ひとつを思い起こせばたちまち次から次へとこの年月のうちに会った人々や出来事が脳裏に浮かぶ。書きたいことは余りに多く、余裕は少ない。年月を少し隔ててみてはじめてこの錯綜した思い出に秩序が与えられ、澄んだ光が現われることを期待せざるを得ない。以下、個々の人や出来事については出来るだけ感想めいた話は避けて、学科スタッフの移り変わりを主にして書かせて頂くことにする。

採用された最初は短期大学部に籍があって、二部になりさらに一部に移籍するまでの数年間、嶋田昇平、上山政義、竹中靖治、のちに鶴野清信の先生方と、上八校舎の正面に入って廊下を進んだ左手の一室に机を並べて楽しい日を送った。

恩師庭田二郎先生が急逝され、その年の後半に先生の授業を引き継ぐことになった。この辺りは非常に鮮明な記憶がある。先生は Chaucer の

Canterbury Tales のうち Knight's Tale をたしか四年生を対象に教えておられた。今も手許に残してあるが、コピー機もない当時のこと、ザラ半紙に、Pollard 編集のテキストとグロッサリーをタイプライターで打ったものが学生に配られていた。学生の中にのちの同僚である舟阪洋子（当時は池田姓）さんもいた。一年生の時に英作文を教えていて良く出来る人だったので記憶にあった。引き継いだ最初の授業を始めたときに指名されたので驚いた、とあとでご本人から聞かされた。

こんな事情で、翌年には、専攻分野の関係で私は一部に移ることになった。当時、本多平八郎先生は退官されていて（もっとも学校の研究室には毎日お見えになって、万葉集の翻訳などをタイプを前にしてやっておられた）、主任となられた森澤三郎先生が学長に選出されたあとを甲元健雄先生が継いでられた。私は先生と大井浩二さんと三人で同室に机を並べた。母校で自分の専門が教えられるなど、毎日毎日が張り合いのある時代であった。片山忠雄、羽田三郎、ウィリアム・ギルキー、オースチン・フェリシーの四先生、林栄一、沖二郎、チャンドラ・グプタの諸先生も同僚であった。程なく、コロンビア大留学を終えた池田洋子さんと、同じくコロンビア大などの留学を終えて近畿大学から田川弘雄、岩手大学からは舟阪晃、それにロバート・イングリシ、佐藤年男の五先生が来られ、お辞めになった甲元、沖、羽田、ギルキーの先生方に代って同僚となった。甲元先生のあとには片山先生が主任に推された。若い人々が多数を占める英語学科となり、敗戦後20余年でひとつの変わり目が訪れつつあったと言える。

大学紛争での片山先生のご心労、林栄一先生の学生委員長としてのお働きは、未だに記憶に生々しい。大学院発足の頃には神戸商科大学から森塚文雄先生が移って来られた。佐藤先生が米国留学のため去られたあと佐竹静枝、少しのちに松田武といった文化系の先生方が加わったのは語学科として注目に値いする変化であった。一方では片山先生ご退官のあとを内田憲男、神戸女学院大へ去られた大井先生のあとを齋藤隆文、イングリシ先生死去のあとをトマス・ベンダーガスト、の先生方が受け継いだ。この頃から主任は林先

## ひとつの世代を回顧して

生であった。羽田先生が青山学院大へ、また佐藤先生も米国へ去られて、実務英語方面の授業は長らく非常勤に頼っていたが、向高男先生をやがて迎えることになった。

1979年（昭和54年）の箕面移転後は、三人も四人も相部屋になっていた上八の旧校舎とちがい、研究室は天国のような良い環境であった。しかし、私にとっては、もう片道2時間の通勤がだんだんと大儀に思えて来る年齢だった。林先生が学長に選出されたあとに甲南女子大から加藤正治先生が移って来られ、森塚先生が主任を引き受けて下さった。

森塚先生ご退官のあと、私が主任を引き継ぐことになった。それ以降の事情は、簡単だが大学の『70年史』に書く機会があったので、転載させてもらうが、移転と前後して外人教師の方々にも、異動があり、ファリシー先生ご退職のあとにジェームズ・クーラス、グプタ先生死去のためイェン・スターク、ペンダーガスト先生が四天王寺国際仏教大へ移られたためウィリアム・ネルソンの各先生がお出でになり、いわば総入れ替えの観を呈した。

さて『大阪外国語大学70年史』によると、

### 〈2. 昭和から平成へ：再調整と拡張〉

昭和60年から平成3年までの6年間、主任としての私にはやはり色々沢山の思い出すべき出来事があったように思える。上八時代に比べてより大きな様変わりが英語学科にあったことは否定できないようである。

森澤、甲元、片山、林、森塚の諸先生がつぎつぎと退官され、昭和生まれのスタッフだけになったことがそのひとつ。次に、従来のスタッフの中核を占めていた語学、文学に加えて文化、政治・経済関係のスタッフをふやせたことで、これまで努力目標として悩んでいた事項の整理がついたことである。文部省の要請を受けて臨時増募として定員を10名増やし70名としたの

もひとつの様変わりであろう。

この6年の間に甲元健雄、森澤三郎の両先生が亡くなられた。森塚文雄、林栄一の各先生がご退官になると大正時代の方がゼロとなり、戦争の影響もあってか、かなり年下の私などが年長者のひとりになって昭和60年4月を迎えた。その年新任の秋田氏を加えて教官スタッフは次の通りであった。英語学担当：金山崇、舟阪晃、加藤正治。英米文学担当：田川弘雄、舟阪洋子、内田憲男、斉藤隆文。英米文化、政治・経済担当：向高男、松田武、秋田茂。客員教授（外国人教師）：J. E.Kulas, I.C.Stirk, W.R.Nelson。その後、英語学に田尻雅士氏が昭和62年に加わった。更に同年秋には、現代米文学担当として渡邊克昭氏を迎えた。翌年、羽田三郎先生ご退職後の久しい空白を埋めて活躍された向高男氏が惜しまれつつ他大学に去られたあと、同年、代わって高橋伸光氏がビジネス英語担当として着任し教学体制を整備することを得たが、年号も改まった次の年、20余年、女性専任スタッフとして業績を残された舟阪洋子氏が事情あって他大学に転任され、学科としてうち続く衝撃に時の移り変わりを痛切に感じた次第であった。しかし幸運にも同年、英語学担当に正保富三氏を、米文化担当に杉田米行氏を招くことができた。平成3年度はこの16人の体制で迎えることになった。

学生定員増で教官スタッフも上記のように増えたが、日本語学科より来る副専攻学生6名を受け入れる必要があり、従来の一学年2クラス制を3クラス制として、小人数編成で授業効果向上を計った。体制の変更で生

## ひとつの世代を回顧して

じた問題点がスタッフの尽力で乗り切れたのは本当に嬉しいことであった。なお男女学生比が昭和60年辺りの5:5からここ3、4年は3:7と女子に比重が傾くまでに至った。毎年かなりよく粒の揃った入学生を迎えて、教える側としては、さあ来いと意気込むのも楽しい限りであった。卒業後の就職、進学の様子は幸いこの6年間まことに良好で、昔の主任の先生方のご苦労は殆ど知らずじまいであっただけに、当時を振り返ってひとしお偲ぶ日々でもあった。

大学院修士課程については、大きな転機を待っている現在であるが、英語学専攻修了者の学界での活躍はまさに目ざましいものがあり、その伝統に恥じぬようスタッフ一同努めてきた。英文学担当の上山政義氏ご退官のあと正木恒夫氏を、英語学には好田實氏を加えて、金山崇、舟阪晃、I.C.Stirk、田川弘雄、J.E.Kulas、松田武の8名が担当スタッフであった。

英語学科の慣例によれば退官するまで務めるはずの主任の役を勝手ながら6年終えたところで打ち切らせてもらい、代わって主任交替制が始まることとなった。

以上、年月の濾過を十分に経ていない多すぎる色々の記憶を披露するのはこの際控えさせて頂き、学科内の大まかな変遷を辿るにとどめた。

となっているが、その後の2年間、舟阪晃さんに主任をつとめて頂いた。ちょうど大学改革の時期にあたって、平常とは違う別のご苦労があったかと推察している。

今年度から一部と二部の教員組織がひとつにまとまったが、英語学科としては国際と地域の2学科に分かれただけでなく、地域学科でも、簡単に言えば英米の二つに更に細分されてしまった。この時期に大学を去る私としては

金 山 崇

出来るのは、この大学の存在意義が新しい体制のもとでますます高められることを祈り、これまでに恩恵と友情を、至らぬ私に与えて下さった先輩、同僚の先生方や卒業生、学生諸氏にあらためて深い感謝の念を捧げることしかない。